

## トワノ・アルポー『オルケゾグラフィ』の 受容史に関する予備的研究

— 16世紀末から18世紀のフランスを中心に —

森 立 子

トワノ・アルポーの『オルケゾグラフィ』(初版, 1589)は、ルネサンス期フランスで実践されていたダンスを後世に伝える書として、舞踊史における重要書の一つに数えられている。今日に至るまで、この時代のダンスの研究者および実践家が『オルケゾグラフィ』の内容の検討を継続的に進めてきているが、同書の受容史に関しては未だに研究が手薄な状況にある。ゆえに本論考では、『オルケゾグラフィ』出版から18世紀までのフランス語圏の舞踊書、および舞踊史に関する言説を対象を絞った上で、それらの中で『オルケゾグラフィ』がどのように捉えられ、論じられているのかを考察した。

この考察はさらに今後、対象となる時代と地域を拡大して進める必要があるが、本論考での検討の過程で、1690年に出版されたフルチエール『万有辞典』の中の「オルケゾグラフィ」の項目が、後の時代にしばしば参照・引用されていたことが明らかになった。この意味において、18世紀の『オルケゾグラフィ』受容史におけるフルチエールの貢献を過小評価することは出来ない。しかしその結果として、アルポーの名が誤った形で後世に伝えられたこと、また「『オルケゾグラフィ』が1588年に出版された」という情報があたかも確定した事実であるかのように伝承されたことも見過ごしてはならない。

キーワード：トワノ・アルポー、オルケゾグラフィ、舞踊記譜法、舞踊史

### 1. はじめに

トワノ・アルポーの『オルケゾグラフィ』(初版, 1589)は、ルネサンス期フランスで実践されていたダンスを後世に伝える書として、舞踊史における重要書の一つに数えられている。同書は、アルポーとその弟子カプリオルの対話の形式で書かれたテキスト、挿絵、ダンス伴奏の旋律や太鼓のリズムを記した楽譜により構成されており、様々な種類のダンスを、専門家のみならず一般読者にも理解出来る形で説明するものとなっている。

ちょうど同時期に、イタリアにおいては、種々のダンスの踊り方を記した舞踊書が複数出版されているが<sup>1)</sup>、フランスにおいてフランス語で出版されたこの種の著作は『オルケゾグラフィ』が唯一のものであり、その意味においてこの書の資料的価値は非常に高い。

19世紀に入って、1888年にロール・フォンタが『オルケゾグラフィ』のリプリント版を詳細な注解を付した形で出版した<sup>2)</sup>ことを一つの契機として、今日に至るまで、この時代のダンスの研究者や実践家が『オルケゾグラフィ』の内容の検討を継続的に進めてきてい

る。本邦においても、アルポー生誕500年にあたる2020年に、古典舞踏研究会原書講読会の訳による『オルケゾグラフィ 全訳と理解のための手引き』が出版されており<sup>3)</sup>、今後日本における『オルケゾグラフィ』研究がさらなる広がりを見せることが期待されている。

しかしながら、その一方で、『オルケゾグラフィ』の受容史に関しては未だに研究が手薄な状況にあることも事実である。とりわけ、『オルケゾグラフィ』が出版された後、他の舞踊書や、舞踊に関連した諸言説の中で『オルケゾグラフィ』がどのように捉えられているのかという問題については、これまで全く議論されてきていない。

こういった状況に鑑み、本論考では、『オルケゾグラフィ』が後世の著作の中でいかに論じられたのかを明らかにすべく考察を進める。ただし、本論考の限られた紙幅の中で、16世紀末以降のすべての時代、またあらゆる地域・言語の言説を対象とした論を展開することは不可能である。従って今回は、『オルケゾグラフィ』出版から18世紀までのフランス語圏の舞踊書、および舞踊史に関する言説に考察対象を絞り、その中で『オルケゾグラフィ』がどのように論じられているのかを検討していくこととする。

## 2. 17世紀

### 2-1. ド・ローズ『舞踊礼賛』

『オルケゾグラフィ』の後に出版されたフランス語の舞踊書として、時代的に『オルケゾグラフィ』と最も近い位置にあるのが、フランソワ・ド・ローズの『舞踊礼賛、騎士そして貴婦人に舞踊を教える完全な方法』<sup>4)</sup>である。

『舞踊礼賛』は1623年に出版されているが、その出版地は不明である。ただし、著者ド・ローズ（1585～90年生、没年不詳）が1620年代初頭にフランスからロンドンに渡っており、この地で舞踊教師として名をなすべく活動していたことから、同書もロンドンで出版された可能性が高いと考えられる。

この書は、前半の「舞踊礼賛」と題された理論の部分と、ダンスの実践方法を論じる後半部分（その前半では「紳士のための」、後半では「淑女のための」方法が提示される）から構成されているが、我々が注目したいのはこれら本文ではなく、それに先立って置かれている「序文」の最終段落である。この序文の中でド・ローズは、「昔からそれぞれの国や地方に〔その地の〕影響を受けた舞踊があったことに注目すべき」<sup>5)</sup>として、地方特有のダンスの例を次々と列挙した上で、これに続いて次のように述べている。

こういったことについてもっと知りたい方がいらっしゃるようでしたら、アルポーが彼のオルケゾグラフィを用いて、私のこの負担を軽くしてくれると約束してくれました<sup>6)</sup>。

この記述のみを検討するにすぎず、ド・ローズがアルポーと個人的に親しい関係にあった、あるいは少なくとも直接的な交流が出来る関係にあったかのようにも読める。しかし、ド・ローズの生年が1585～90年であることを考えると、1520年生まれで1595年に没しているアルポーの最晩年に両者が出会ったとしても、その時点でド・ローズの年齢は5歳から10歳の間ということになる。このような年齢差の二人が、引用文のような内容の会話を交わす機会があったと考えることは困難である。

従って、先の文章は、実際に起こった事実の記述ではなく、先達たるアルポーに対する敬意も含めたド・ローズのレトリックとして解釈するべきである。

とは言え、アルポーの『オルケゾグラフィ』がド・

ローズによってこのような形で言及されていることの重要性について認識しておく必要がある。なぜならそれは、『オルケゾグラフィ』が出版から30年以上経った時点においても、参照すべき舞踊書としての価値を保持していたことを示すものだからである。

### 2-2. ド・ピュール、メネストリエ

17世紀後半には、1668年にミシェル・ド・ピュールの『新旧のスペクタクルについての概要』<sup>7)</sup>が、1682年にはクロード＝フランソワ・メネストリエの『劇の諸規則に従う過去と現在のバレエについて』<sup>8)</sup>が、いずれもパリで出版されている。これらはこの時代を代表する舞踊書とされるものであるが、両者ともに「オルケゾグラフィ」、あるいは「アルポー」についての記述を一切含んでいない。

ただしこの事実の中に、即座にアルポーの『オルケゾグラフィ』の影響力の低下を見て取るのは早計である。なぜなら、上掲の二書はいずれも「スペクタクル」としての舞踊について論じるもので、もっぱら社交のための舞踊について記述する『オルケゾグラフィ』とは考察の対象を異にしているからである。つまり、ド・ピュール、メネストリエの両者にとって、『オルケゾグラフィ』は自らの議論の「対象外の」舞踊について論じる書であり、それゆえ敢えてこれについて言及するに至らなかったと考えるべきであろう。

### 2-3. フュルチエール『万有辞典』

17世紀末には、本格的なフランス語辞典の先駆をなす辞典類が複数刊行される。まず1680年にリシュレの『フランス語辞典』<sup>9)</sup>、1690年にフュルチエールの『万有辞典』<sup>10)</sup>、さらに1694年には『アカデミー・フランセーズ辞典』<sup>11)</sup>の初版が出版されている。

うち、「オルケゾグラフィ」あるいは「アルポー」への何らかの言及があるのはフュルチエールの『万有辞典』のみである。同辞典においては「オルケゾグラフィ」という項目が一般名詞として立てられており、そしてこれが、「舞踊の技術と記述」で「[[舞踊] ステップが音符とともに記譜される」ものと定義されている<sup>12)</sup>。

またこれに続き、アルポーとその著作『オルケゾグラフィ』についての記述が加えられている。ここには次のように記されている。

1588年にランゲルで出版された、トワネ・アルポー

# ORC.

**ORCHESOGRAPHIE. subst. fem. Art & description de la danse, dont les pas sont notés avec des notes de Musique. Il y a un Traité curieux fait par Thoinet Arbeau imprimé à Langres en 1588. qu'il a intitulé Orchesographie; C'est le premier, ou peut-être le seul qui a noté & figuré les pas de la danse de son temps, de la même manière qu'on note le chant & les airs.**

《Source gallica.bnf.fr/Bibliothèque nationale de France》

図1 フルチエール『万有辞典』「オルケゾグラフィ」項目の記述（下線は論文著者による）

による興味深い概論がある。そのタイトルは『オルケゾグラフィ』である。これは、音楽を記譜するのと同様に、当時の舞踊のステップを記譜・図示した最初の、そして恐らく唯一のものである<sup>13)</sup>。

この記述の中で注目しておきたいのは以下の二点である。①『オルケゾグラフィ』の出版年が1588年とされているという点。今日現存している（アルポー存命中に出版された）原典版は、1589年の年号が入っているものと、年号表示のないものの2種が存在している<sup>14)</sup>。一方で、フルチエールによるこの項目には、1588年と記載されている。ただし、この情報の根拠がどこにあるのかは不明である。②アルポーの名が「トワネ Thoinet」と誤って綴られている点。これについては、この時点では単なる誤記であると考えられるのだが、しかしこの誤記はこれ以降の記述の引用関係を考える際に有効な鍵を与えるものとなっているため注意が必要である。

## 2-4. ファイエ『コレグラフィ』

17世紀最末期の1700年には、パリで『コレグラフィ』の初版が出版されている<sup>15)</sup>。同書は今日「ポーシャン＝ファイエ・ノーテーション」<sup>16)</sup>と呼ばれている記譜システムについて説明した著作であり、その後この記譜システムを用いて多数の舞踏譜が作成されたことから、この書がいかに大きな影響を舞踊界に与えたかを見てとることが出来る。

ポーシャン＝ファイエ・ノーテーションは、今日「バ

ロック・ダンス」と呼ばれるダンスの一ジャンルに特化した記譜システムであり、アルポーの『オルケゾグラフィ』で説明されているダンスに適用されるものではない。しかしながら、ファイエは『コレグラフィ』の序文において、この前世紀の著作について以下のような形で言及している。

何人もの先人たちが、記号を使って、舞踊を紙の上に記そうとしてきた。しかし彼らの試みは実を結ばなかったので、私は自分の記譜の試みを突き詰めて人々の役に立つようにしようと努めた。確かに、フルチエールの辞典のORCの文字から始まる項には、舞踊のステップが音楽の音符とともに記されている、ある一冊の舞踊書についての記載がある。だが、この本はもはや存在しない。ここに〔フルチエールの〕文章そのものを示す。

1588年にラングルで出版された、トワネ・アルポーによる興味深い概論がある。そのタイトルは『オルケゾグラフィ』である。これは、音楽を記譜するのと同様に、当時の舞踊のステップを記譜・図示した最初の、そして恐らく唯一のものである。

そういうわけで、私たちは、舞踊記譜の最初のアイデアを与えてくれたこの著者に感謝する（以下略）<sup>17)</sup>。

序文の冒頭に置かれているこの文章において、ファイエは、自らが舞踊記譜という発想を得たその源がアルポーの『オルケゾグラフィ』であることを明らかにし

ている。これは、『オルケゾグラフィ』の後世への影響を示す、重要な証言の一つと捉えられる。

ただしフィエは同時に、「この本『オルケゾグラフィ』はもはや存在しない」と記している。この言明により、フィエ自身の著書の存在意義が強調されることになるわけだが、しかし実際この時代に『オルケゾグラフィ』が全く現存していなかったかという点、後述するブロッサールの例に照らしてみても<sup>18)</sup>、そうであるとは言い難い。むしろ、上記のフィエの言明は、(自著の価値を高めるという戦略も含めた)誇張表現とみるのが適切である。

この他に指摘しておくべきは、フィエがフェルチエールの『万有辞典』の記述の一部を、基本的に一言一句もろさずそのまま引用しているという点である。上に引用したフィエの文章では、二段落目が『万有辞典』の記述の引用になっている。そして、フェルチエールの記述がそうであったように、ここでも『オルケゾグラフィ』の出版年は1588年と記載され、またアルポーの名前は「トワネ」と誤記されていることが分かる。

### 3. 18世紀

#### 3-1. ブロッサール『音楽事典』

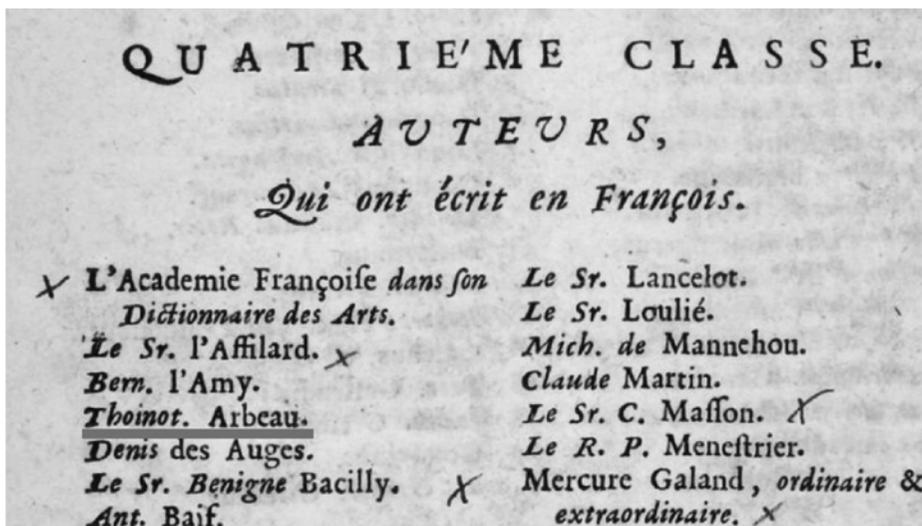
セバスティアン・ド・ブロッサールの『音楽事典』(初版、1703)<sup>19)</sup>は、フランス語音楽事典の嚆矢とされる

著作である。音楽に関する用語を扱う本書の主要部分に『オルケゾグラフィ』の内容を扱う項目は立てられていないが、巻末の「著者カタログ」にアルポーの名が記されているという事実は注目に値する。

この「著者カタログ」は、あらゆる時代、地域、言語を包括的に対象とし、音楽関係の著書を出している著者の名前を列挙したものとなっている。ここで興味深いのは、著者リストに三つの区分が設けられていることである。すなわち、①ブロッサール自身が実際にその著作を読み、検討した著者名、②まだ手にして検討していないが、入手は容易であり、また内容も把握している著作の著者名、③入手が難しく、自分では見たこともなく、読んだこともない著作の著者名、および、他人からの情報でその存在を知った著作の著者名、という三つの区分である。

そのうち、アルポーの名は①の区分の中に現れる。この①にはさらに下位区分が設けられており、第1クラスがギリシャ語著作の著者、第2クラスがラテン語、第3クラスがイタリア語、第4クラスがフランス語、第5クラスがドイツ語、英語、その他の言語となっている。当然ながらアルポーの名は、第4クラスの中に記されている。

この事実が明らかにしているのは、17世紀末から18世紀の初頭の時点で、ブロッサールがアルポーの『オルケゾグラフィ』を実際に手に取り、読んでいたということである。言い換えれば、『オルケゾグラフィ』



《Source gallica.bnf.fr/Bibliothèque nationale de France》

図2 ブロッサール『音楽事典』著者カタログ(部分、下線は論文著者による)

はこの時代においてなお入手しうる著作であったということになる。これは、先に引用したファイエの「この本はもはや存在しない」という言説への明確な反証となっている。

### 3-2. ボネ『聖俗の舞踊通史』

18世紀前半、1723年には、ジャック・ボネによる『聖俗の舞踊通史』がパリで出版されている<sup>20</sup>。この書にもアルポーと『オルケゾグラフィ』への言及が認められるのだが、そこには、『オルケゾグラフィ』がもはや存在しないという指摘と、一部の人々が実際にこの書を所有したり読んだりしていたという証言とが並存している。

ボネは、他の様々な科学や芸術と同様、舞踊に関しても、蛮族の侵略や時代の趨勢によって過去の情報が失われてしまっていることが往々にして生じていると指摘し、その例として『オルケゾグラフィ』を挙げている<sup>21</sup>。この例示の部分は「このことは、フルチエール氏の『万有辞典』、ORCの文字から始まる項によって確認される」という文章から始まっており、ボネがフルチエールの辞典に依拠していることが明らかにされている。また、これに続く文章は、「…と彼[フルチエール]が言っている」という文言が追加されていることを除くとすべて、フルチエールの文章の一言一句違わぬ引用となっている<sup>22</sup>。そのため、出版年は「1588年」、著者名は「トワネ・アルポー」とされている。

そしてさらにこの引用に続き、ボネは「この書はもはや存在しない、あるいは少なくとも非常に珍しいものとなってしまっている」<sup>23</sup>と加えており、これは先に挙げたファイエの言説を裏付けているかのようにも見える。

ところが、この文章をさらに先に読み進めていくと、これとは矛盾する記述が現れる。

トワネ・アルポーがランゲルの司教座聖堂参事会員であったことを知っておいて良い、これはアカデミーのド・ラ・モンノワ氏が私に教えてくれたことだ。彼は長い間、自分の書齋にこの書を所有していた。そして彼はこの書を、王の図書館に譲渡したようである<sup>24</sup>。

ここで名が挙げられているド・ラ・モンノワ氏とは、1713年からアカデミー・フランセーズの会員となった

ベルナール・ド・ラ・モンノワ<sup>25</sup>のことであると考えられる。そのド・ラ・モンノワが『オルケゾグラフィ』を実際に所有していたことが、上記の証言によって明らかにされている。つまり、ボネの議論の中には、矛盾する二つの記述（『オルケゾグラフィ』が現存している/していない）が含まれているということになる。なお、上の引用文は、ボネとド・ラ・モンノワの間に直接の交流があったことを示すものでもある。このことを踏まえるならば、ド・ラ・モンノワが『オルケゾグラフィ』を所有していた（つまり『オルケゾグラフィ』が現存している）とする記述には、相応の信憑性があると考えることが出来る。

### 3-3. カユザック『古代と現代の舞踊』

18世紀中葉は、舞踊史において「バレー改革期」と呼ばれる時代であり、この時期に「改革」を理論的な側面から支えた二点の舞踊書が出版されている。その一つが、カユザックの『古代と現代の舞踊、あるいは舞踊史概論』（1754）である<sup>26</sup>。同書は、人類発祥以来の舞踊の歴史と、舞台芸術についての理論的な考察で構成されるものであるが、これに先立ち、カユザックは、序文において自著の執筆目的を次のように述べることにより正当化している。

私が扱っている主題は、我々の言語で書かれたものとしては新しいものである。もっとも、すでに我々には、舞踊史[原注：ボネ]とバレー概論[原注：イエズス会のP.メネストリエ]がある。前者は、私が考えている目的には触れていない。後者は素晴らしい本である。しかし、それはもはや存在しないジャンル、私が主張するような劇的舞踊とは非常に遠い関係にあるジャンルについて語っている。

トワノ・アルポー<sup>27</sup>と、ファイエ、そしてポーシャンが著作者とされた<sup>28</sup>コレグラフィは、舞踊の基礎でしかない。私の目的は、この芸術の一種の詩学である<sup>29</sup>。

ここでは『オルケゾグラフィ』の書名への言及はなく、アルポーの名はファイエやポーシャンとともに、舞踊を記譜する技術である「コレグラフィ」の考案者として挙げられている（この事実は、「オルケゾグラフィ」の語が舞踊記譜法を示す一般名詞として定着しなかったことを示唆している<sup>30</sup>）。

とはいえ、過去の主要な舞踊書の著者として、ボネ、

メネストリエ、ファイエ、ポーシャンらと並んでアルポーの名が挙げられている点を看過することは出来ない。カユザックによるこの言及からは、アルポーが、死後150年余り経ったこの時代において、舞踊史上の重要人物の一人と見なされる存在となっていたことが読み取れる。

### 3-4. 『百科全書』

ディドロとダランベールの編集による『百科全書』は、18世紀フランスの知を集積した大事典で、1751年から1761年にかけて本文17巻が、また1762年から1772年にかけて図版11巻が刊行されている<sup>31)</sup>。

この『百科全書』には、アルポー、あるいは『オルケゾグラフィ』への言及がある項目が複数認められる。その中でまず注目しておきたいのは、「オルケゾグラフ Orchésographe」という項目である。匿名執筆者によって書かれたこの項目の見出し語は恐らく誤記であり、本来は「オルケゾグラフィ Orchésographie」とすべきところ、「i」の一文字を欠落させてしまったものと考えられる。実際、同項目の本文の内容は、アルポーの『オルケゾグラフィ』を念頭に置いたものとなっている。

舞踊の概論、もしくは舞踊のステップを記譜する方法。ラングルの司教座聖堂参事会員であるトワネ・アルポーが、舞踊記譜法というアイデアを最初に打ち出した。他の人々が彼の後に続き、彼が考案したものを完成させた。アルポーの概論は1588年にラングルで出版された<sup>32)</sup>。

見出し語の誤記に加え、この本文の中でもアルポーの名が「トワネ」と誤って記されている。この誤記は、すでに他の著作に関して指摘したように、フルチエールに由来するものであると考えられる。また、『オルケゾグラフィ』の出版年が1588年とされている点についても同様である。ただし、本項目の匿名執筆者が直接フルチエールの辞典を参照したのか、あるいは、他の文献から情報を得たのかについては、この記述だけでは判断し難い。

一方、この「オルケゾグラフ」の項目とは別に、『百科全書』には「コレグラフィ」という項目も立てられている。この項目は、ルイ＝ジャック・グシエ<sup>33)</sup>によって執筆されたもので、こちらにはフルチエールの辞典を参照したことが明示的に記されている。それ

ゆえ、ここにもやはりアルポーの名前の誤記と、1588年という出版年の記載が認められる。

記号や指示的なフィギュアを使って、歌 [の記譜] のように舞踊を記譜する技術。それは過去の人々が知らなかった、あるいは我々にまで伝えられなかった技術の一つである。フルチエールは、1588年にラングルで印刷され、オルケゾグラフィというタイトルの付けられたトワネ・アルポーによる興味深い概論について述べている。トワネ・アルポーは、舞踊のステップを旋律の音符 [楽譜] とともに伝えようと考えた最初で恐らく唯一の人である。しかし彼は突き詰めたところまではいかなかった (以下略)<sup>34)</sup>。

そしてこの文章に続く部分で、『オルケゾグラフィ』における舞踊の記譜の方法が説明されている。すなわち、①音楽の旋律が示されており、その旋律の各音に対して行うべきステップが記されている、②ステップを行いながら動いていく道筋については、何も記されないか、あるいは文章でおおよそのところが示されるのみである、との記述がある。

さらにこれに続き、ポーシャン＝ファイエの記譜法——踊っていく道筋を記し、それを音楽の小節線と対応する線で区切り、そこに動きを記号で記していく——の説明が置かれており、そこに、アルポーは「このような方法を考えつかなかった」との一文が挟まれている<sup>35)</sup>。つまり、アルポーを舞踊記譜法の考案者としつつも、しかし彼の記譜法は不完全であり、今日(18世紀)ではより優れた記譜法が存在している、という進歩主義的歴史観がここに現れていると言える。

なお、上に挙げた二つの項目の他にも、『百科全書』にはアルポーと『オルケゾグラフィ』に触れている項目が複数存在している。すなわち、カユザックの執筆による「ブランル」、「マタサンの踊り、またはブフォン」と、ジョクールの執筆による「パヴァーヌ」である。特定の舞踊種に関するこれらの項目の記述はいずれも、『オルケゾグラフィ』で説明されている内容を踏まえたもの(その要約等)になっている。

### 3-5. ノヴェール『舞踊とバレエについての手紙』

1760年にリヨンとシュトゥットガルトで出版されたジャン＝ジョルジュ・ノヴェールの『舞踊とバレエに

ついでの手紙』(初版)<sup>36)</sup>は、先述のカユザックの著作の数年後に発表され、各地で大きな反響を呼んだ、「バレー改革期」の最重要書と称される文献である。

書簡体で書かれたこの著作は、15の「手紙」から構成されている。うち、第13の手紙は、舞踊記譜法としての「コレグラフィ」についての考察となっているが、その本文冒頭に置かれた「コレグラフィ」の語に脚注が付けられており、その中にアルポーと『オルケゾグラフィ』への言及が認められる。

ラングルの司教座聖堂参事会員であるトワネ・アルポーは、『オルケゾグラフィ』と題して1588年に出版した概論によって最初に有名になった。彼は旋律の各音の下に、彼がふさわしいと考える舞踊の動きとステップを記していた。続いてポーシャンがコレグラフィに新たな形式を与え、トワネ・アルポーの創意工夫に富んだ下絵を完成させた。彼は、一つ一つに意味と異なる価値とを付与した記号によって、ステップを記述する方法を発見した。そして彼は高等法院の判決により、この技術の発明者と宣言された<sup>37)</sup>。フィエはこれに熱心に取り組み、この分野に関していくつかの著作を残した<sup>38)</sup>。

ここでもフルチエールの記述に倣った形でアルポーと『オルケゾグラフィ』が紹介されていることが分かる(ただしノヴェールがフルチエールの辞典を直接参照したかどうかは不明である)。また、先に見た『百科全書』の「オルケゾグラフ」や「コレグラフィ」の項目と同様、アルポーを舞踊記譜の創始者と位置づけた上で、彼の不完全な「下絵」をポーシャン、フィエが完成へと導いたとする歴史的認識が打ち出されていることが分かる。

### 3-6. コンパン『舞踊事典』

1787年にパリで出版されたシャルル・コンパンの『舞踊事典』<sup>39)</sup>は、「舞踊に特化した最初の事典」<sup>40)</sup>として知られている。この事典中の記述には他の著作からの孫引きもしばしば見受けられるが、とは言え、18世紀半ばにおける「舞踊に関する知」を集積したものとして、同書は一定の資料的価値を持っていると言える。

この『舞踊事典』には、「オルケゾグラフィ」という項目が立てられている<sup>41)</sup>。その内容はフルチエールの当該項目の記述をほぼ全面的に引用したものに

なっているが、一部に改変と加筆による修正が見られる。この修正箇所は以下の2か所である。①フルチエールの辞典において「これは、音楽を記譜するのと同様に、当時の舞踊のステップを記譜・図示した最初の、そして恐らく唯一のものである」とされていた文章が、「これは、音楽を記譜するのと同様に、当時の舞踊のステップを記譜・図示した最初のものである」に修正されている<sup>42)</sup>。②末尾に「その後、あのポーシャンも同じこと〔舞踊記譜〕を行った。この技術には『コレグラフィ』という呼称も与えられた」という文章が加筆されている。これらの修正は、アルポーの後にポーシャンも舞踊記譜の方法を開発したこと、そしてそれに「コレグラフィ」という(「オルケゾグラフィ」とは)別の呼称が与えられたことを明確化するためのものである。

ちなみに、コンパンの『舞踊事典』には、「コレグラフィ」という項目も立項されている<sup>43)</sup>。この項目の内容は、先述のノヴェールの文章(『舞踊とバレーについての手紙』、第13の手紙の脚注)全文の引用となっている。

また『舞踊事典』においては、上記の2項目とは別に、「アルマンド」、「ブフォン」、「ブランル」、「カナリ」、「ガイヤルド」、「ガヴォット」、「パヴァーヌ」、「ヴォルト」という特定の舞踊種の項目において、程度に差はあるものの、アルポーの『オルケゾグラフィ』に依拠した記述が認められる。これら各項目における『オルケゾグラフィ』への依拠の度合いを詳述することは本論考の目的とするところではない。しかしながらここで指摘しておきたいのは、例えば「アルマンド」の項目<sup>44)</sup>のように、『オルケゾグラフィ』の文章がほぼそのまま引用されているケースもあり、コンパンが『オルケゾグラフィ』の本文を実際に参照していたと考えられるということである。その一方で、アルポーの名前は常に「トワネ」と誤記されており、先に挙げた他の文献と同様、フルチエール由来の記載がそのまま受け継がれていることも指摘しておかねばならない。

## 4. 結 び

本論考は、トワネ・アルポー『オルケゾグラフィ』の受容史解明に向けた予備的考察の試みとして構想されたものであり、その考察対象を「『オルケゾグラフィ』出版(16世紀末)から18世紀までのフランス語

圏の舞踊書、および舞踊史に関する言説」に限定している<sup>45)</sup>。よって、現時点で受容の全体像を示すような結論を導き出すことは差し控えなければならないが、今回の検討で得られた情報の要点をここであらためて整理し示しておくこととしたい。

①『オルケゾグラフィ』出版以降18世紀に至るまで、フランス語圏においては、アルポーないし『オルケゾグラフィ』に言及している舞踊書や舞踊史に関する書籍が出版され続けている。このことは、アルポーと『オルケゾグラフィ』がこの約2世紀間を通じ、舞踊史の文脈において一定の評価を得る存在であったことを示している。

②17世紀末以降、『オルケゾグラフィ』はもはや存在しない」とする言説も現れるようになるが、少なくとも18世紀前半までは（プロッサール『音楽事典』やボネ『聖俗の舞踊通史』の例が示すように）『オルケゾグラフィ』の実物を所有していた人がいたことが確認出来る。また18世紀中頃から後半にかけても、『オルケゾグラフィ』の本文を参照していると考えられる例は複数存在している（『百科全書』、コンパン『舞踊事典』）。

③フルチエール『万有辞典』（1690）は、アルポー『オルケゾグラフィ』を「舞踊記譜の最初の試み」と位置づけている。さらにこの後、フィエ『コレグラフィ』（1700）が出版されると、アルポーの舞踊記譜の（不完全な）最初の試みを『コレグラフィ』が完成へと導いた、とする進歩主義的な歴史認識も現れるようになる。

④フルチエール『万有辞典』には「オルケゾグラフィ」の項が立項されており、その記述はその後しばしば参照、引用の対象となっている。この意味で、『オルケゾグラフィ』受容史におけるフルチエール『万有辞典』の貢献を過小評価することは出来ない。なお、フルチエールの記述は、アルポーの名の誤記（「トワネ・アルポー」）や『オルケゾグラフィ』の出版年を1588年とする見解を含んでいるが、これらは後の時代における引用においてもそのまま引き継がれている<sup>46)</sup>。

## 注

1) その例として、以下の書が挙げられる。

Caroso, Fabrizio, *Il Ballarino*. Venezia, 1581.

*Id.*, *Nobiltà di Dame*. Venezia, 1600.

Negri, Cesare, *Le Gratie d'Amore / Nuove inventioni di*

*balli*. Milano, 1602/1604.

2) *Orchésographie par Thoinot Arbeau*. Réimpression précédée d'une Notice sur les Danses de XVI<sup>e</sup> siècle par Laure Fonta. Paris : F. Vieweg, 1888.

ロール・フォンタ（1845-1915）は、19世紀後半のバリ・オペラ座で活動したダンサー。彼女は引退後に舞踊史の研究に向かい、上掲書の他、17世紀と18世紀の舞踊についての著作を著した。

3) アルポー、トワノ『オルケゾグラフィ 全訳と理解のための手引き』今谷和徳、中村好男、服部雅好編著、古典舞踏研究会原書講読会訳、東京：道と書院、2020年。

4) De Lauze, François, *Apologie de la danse et la parfaite methode de l'enseigner tant aux Cavaliers qu'aux dames*, 1623. なお、タイトル中の単語の綴りは当該書籍に示された通りとする。以下の書籍についても同様。

5) *Ibid.*, p.9.

6) *Ibid.*, p.10. 下線は論文著者による。

7) De Pure, Michel, *Idée des spectacles anciens et nouveaux*, Paris, 1668.

8) Ménestrier, Claude-François, *Des ballets anciens et modernes selon les regles du theatre*, Paris, 1682.

9) Richelet, Pierre, *Dictionnaire françois*, Genève, 1680.

10) Furtière, Antoine, *Dictionnaire universel*, La Haye, 1690.

11) *Dictionnaire de l'Académie Française*, 1<sup>ère</sup> éd. Paris, 1694.

12) Furtière, *op.cit.* (no page number)

13) *Ibid.* (no page number)

14) 中村好男『『オルケゾグラフィ』の原典、ファクシミリ版および翻訳本』、トワノ・アルポー『オルケゾグラフィ 全訳と理解のための手引き』東京：道と書院、2020年、316～317頁。

15) Feuillet, Raoul-Auger, *Choregraphie, ou l'art de décrire la dance*, Paris, 1700.

16) フィエが『コレグラフィ』で発表した舞踊記譜法の真の考案者は、ピエール・ボーシャン（1631-1705）であると考えられている（ボーシャンは1704年にフィエを剽窃の廉で訴えた。国務会議はボーシャンが考案者であることを認めたが、フィエにも引き続き出版を許可する措置をとった）。それゆえ、『コレグラフィ』で紹介された記譜システムを、今日では「ボーシャン=フィエ・ノーテーション」と呼ぶことが一般化している。

17) Feuillet, *op.cit.* (no page number)

18) 本論考3-1. 参照。

19) Brossard, Sébastien de, *Dictionnaire de musique*, Paris, 1703.

20) Bonnet, Jacques, *Histoire générale de la danse, sacrée et profane*, Paris, 1723.

21) *Ibid.*, pp.19-20.

22) *Ibid.*, p.20.

23) *Ibid.*, p.20.

24) *Ibid.*, pp.20-21.

- 25) ベルナル・ド・ラ・モンノウ (1641-1728) は法律関係の職と並行して、詩人、文献学者、批評家として活動した人物。彼は1713年にアカデミー・フランセーズの会員に選ばれている。
- 26) Cahusac, Louis de, *La danse ancienne et moderne, ou Traité historique de danse. Tome I-III*, La Haye, 1754. なお、「改革」を理論的な側面から支えた舞踊書として挙げられるもう一点の著作は、ノヴェール『舞踊とバレエについての手紙』である。この書については後述する。
- 27) この語にも原注が付けられている。その内容は以下の通り。「彼はラングルの司教座聖堂参事会員であった。コレグラフィとは、音楽を記譜するように舞踊を記譜する技術のことである。」
- 28) 注16参照。
- 29) Cahusac, *op.cit.*, (Tome I) pp.xx-xxi.
- 30) 実際、『アカデミー・フランセーズ辞典』においては、第3版(1740)から舞踊記譜法の意味で「コレグラフィ」という項目が設けられるようになっていく。これに対し、「オルケゾグラフィ」という項目は、第3版においても、それ以降の版においても立てられていない。
- 31) Diderot, Denis, & d'Alembert, Jean le Rond (eds.), *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres*, 17 vols. text and 11 vols. plates, Paris, 1751-72. なお、以下の注では *Encyclopédie* と略記する。
- 32) *Encyclopédie*, Vol. 11, p.577.
- 33) ルイ=ジャック・グシエ (1722-1799) は技術者、図版画家。『百科全書』において図版画家として貢献すると同時に、多くの項目の執筆も手がけた。
- 34) *Encyclopédie*, Vol. 3, p.367.
- 35) *Ibid.*, p.367.
- 36) Noverre, Jean-Georges, *Lettres sur la danse, et sur les ballets*, Stuttgart & Lyon, 1760.
- 37) 注16参照。
- 38) Noverre, *op.cit.*, p.362.
- 39) Compan, Charles, *Dictionnaire de danse*, Paris, 1787.
- 40) Russell, Tilden, *Dance Theory : Source Readings from Two Millennia of Western Dance*, New York : Oxford University Press, 2020. p.116.
- 41) Compan, *op.cit.*, pp.275-276.
- 42) 文中の下線は論文著者による。
- 43) Compan, *op.cit.*, p.84.
- 44) *Ibid.*, pp.8-9.
- 45) なお18世紀については、関連書として以下の文献も調査したが、これらにはアルポーないし『オルケゾグラフィ』への言及が認められなかったことを付記しておく。
- Rameau, Pierre, *Le maître à danser*, Paris, 1725.
- Id.*, *Abbrégé de la nouvelle methode, dans l'art d'ecrire ou de tracer toutes sortes de danses de ville*, Paris, 1725.
- Rousseau, Jean-Jacques, *Dictionnaire de musique*, Paris, 1768.

- 46) 『オルケゾグラフィ』初版の出版年については、中村がその論考で示しているとおり(中村, 前掲論文, 324~326頁), 今日でもなお情報に混乱が見られる。アルポーの生前に出版された版で現存しているものとして、1589年の年号が入っているものと、年号の記載のないものの2種あることについては本文中で記したとおりである。そのうち、年号の記載のない版の方を1588年出版と見なし、それがゆえに「1588年版と1589年版とが両方現存している」とする見解が存在している。この見解については、現時点において十分な根拠が示されているとは言い難いが、にもかかわらずこの説が提示されるその背景には、本論考で考察してきた「フェルチエール『万有辞典』の記述の伝承」という問題も少なからず関与しているのではないかと推測される。

## 引用文献

### ① 一次資料

- Bonnet, Jacques, *Histoire générale de la danse, sacrée et profane*, Paris, 1723.
- Brossard, Sébastien de, *Dictionnaire de musique*, Paris, 1703.
- Cahusac, Louis de, *La danse ancienne et moderne, ou Traité historique de danse. Tome I-III*, La Haye, 1754.
- Compan, Charles, *Dictionnaire de danse*, Paris, 1787.
- De Lauze, François, *Apologie de la danse et la parfaite methode de l'enseigner tant aux Cavaliers qu'aux dames*, 1623.
- De Pure, Michel, *Idée des spectacles anciens et nouveaux*, Paris, 1668.
- Dictionnaire de l'Académie Française*, 1<sup>ère</sup> éd. Paris, 1694.
- Diderot, Denis, & d'Alembert, Jean le Rond (eds.), *Encyclopédie, ou Dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers, par une société de gens de lettres*, 17 vols. text and 11 vols. plates, Paris, 1751-72.
- Feuillet, Raoul-Auger, *Choregraphie, ou l'art de décrire la danse*, Paris, 1700.
- Furrière, Antoine, *Dictionnaire universel*, La Haye, 1690.
- Ménéstrier, Claude-François, *Des ballets anciens et modernes selon les regles du theatre*, Paris, 1682.
- Noverre, Jean-Georges, *Lettres sur la danse, et sur les ballets*, Stuttgart & Lyon, 1760.
- Richelet, Pierre, *Dictionnaire françois*, Genève, 1680.

### ② その他

- Orchésographie par Thoinot Arbeau*. Réimpression précédée d'une Notice sur les Danses de XVI<sup>e</sup> siècle par Laure Fonta, Paris : F. Vieweg, 1888.
- Russell, Tilden, *Dance Theory : Source Readings from Two Millennia of Western Dance*, New York : Oxford University Press, 2020.
- 中村好男 『『オルケゾグラフィ』の原典, ファクシミリ版

および翻訳本」, トワノ・アルポー『オルケゾグラフィ全訳と理解のための手引き』東京:道和書院, 2020年, 316~332頁.

#### 参考文献

##### ① 一次資料

Arbeau, Thoinot, *Orchesographie, et traicte en forme de dialogue*, Langres, 1589.

Rameau, Pierre, *Abregé de la nouvelle methode, dans l'art d'écrire ou de tracer toutes sortes de danses de ville*, Paris, 1725.

Rameau, Pierre, *Le maître à danser*, Paris, 1725.

Rousseau, Jean-Jacques, *Dictionnaire de musique*, Paris, 1768.

##### ② その他

Kafker, Frank A., "Notices sur les auteurs des dix-sept volumes de 《discours》 de l'Encyclopédie." In *Recherch-*

*es sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, n.7, 1989. pp.125-150.

Académie française. Les membres, Bernard de la Monnoye. <https://www.academie-francaise.fr/les-immortels/bernard-de-la-monnoye#:~:text=Bernard%20de%20LA%20MONNOYE%20C3%89lu%20en%201713%20au%20fauteuil%2030&text=Il%20fut%20le%20premier%20laur%C3%A9at,vint%20habiter%20Paris%20en%201707.>

(参照日2022年8月31日)

(令和4年9月6日受付)  
(令和4年12月8日受理)

Preliminary Study on the Reception History of Thoinot  
Arbeau's *Orchésographie* :  
Focusing on France from the End of the 16<sup>th</sup> Century to the 18<sup>th</sup> Century

*MORI Tatsuko*

*Bulletin of Japan Women's College of Physical Education, 2023, 53, 13-23*

Thoinot Arbeau's *Orchésographie* (1st edition, 1589) is considered one of the most important works in the history of dance as it documents the dance practices of Renaissance France. To date, researchers and practitioners of dance have been continuously examining the contents of *Orchésographie*, but there is still a lack of research on the history of its reception. Therefore, this paper examines how *Orchésographie* is perceived and discussed in French discourses on the history of dance from the end of the 16<sup>th</sup> century to the 18<sup>th</sup> century.

Although it is necessary to further expand the period and region covered by this study, it has become clear at this point that the entry on "Orchésographie" in Antoine Furetière's *Dictionnaire universel* (1690) was often referred to and quoted throughout the 18th century. In this sense, Furetière's contribution to the history of the reception of *Orchésographie* cannot be underestimated. However, it should not be overlooked that, as a result, Thoinot Arbeau's first name was passed down to posterity in an erroneous form and that the statement that the "*Orchésographie* was published in 1588" was handed down as if it were a definite fact.

**Keywords** : Thoinot Arbeau, *Orchésographie*, dance notation, dance history

